実践研究
私の保育ノートから

保育の学び、教科の学び

満田琴美

「保育と教科教育」。子どもたちの成長と共に日々を過ごされる方ならば、一度は思いを巡らせたことのあるテーマではないでしょうか。自分の名前が書ける、漢字をたくさん知っている、足し算引き算ができるなど、最近では保育の中にも教科的教育が期待されていると聞きます。私は「塾の先生」として、学ぶ子どもたちを身近に見つめてきました。そこで出会った多くの子どもたちの姿から、勉強とは何か、学びとは何かを考えていきたいと思います。

ようこそ、私の教室へ

私は以前、個別指導塾の教室責任者をしていました。個別指導塾とは学校のような一斉指導の形態をとらず、講師一名が生徒一名から数名を個々に指導する学習塾のことです。個別に対応しますので、学年も科目も、通塾回数も時間帯も、進度も難易度も、生徒一人ひとり皆、異なります。教室の規模は二、三十名から、大きいところでは二、三百名もの生徒たちが在籍し、小学一年生から大学受験を控えた浪人生までが通っています。講師、つまり勉強を教える「先生」はアルバイトの学生たちで、大教室では五十名以上もの大学生が所属します。大学の学部一年から大学院博士課程までの現役大学生が中心です。

当時、私は自分の教室運営の参考にと、他の教室

を見学させてもらっていました。その中に、今でも印象に残っている教室があります。

その日は教室が最も忙しい時間帯に訪ねることになりました。○○教室のスタッフたちは来訪者である私を迎えてくれると、すぐに中断した生徒との会話、講師への伝達に戻ってしまいました。講師控室をのぞくと、次の授業のために待機する講師たちで和気あいあいとしています。「座りますか?」「ゴチャゴチャしてますけど、よかったらどうぞ」。座席表を見ようと教室入り口の待合席に近づくと、足元に番犬のようなカバンを従えた男子高校生がスッと足を引っ込め、私を見上げます。「今日は何かのチェックっすか」。教場を回ると、授業中の講師が「こんにちはっ」。その声に、中学生の女の子たちがパッと顔を上げ、私が声をかけるとニコッと照れ笑い。少し離れた席の小学生の男の子が不審者に気づき、「あの人だぁれ?」と講師の耳元でささやいています。「誰だろうね、聞いてきてごらん」。講師の許可を握りしめて走り寄ってきました。「誰ですか?」「△△教室から来ました満田先生といいます。よろしくね」「よろしくぅ」。目をクルクルとさせて逃げ帰っていき、講師に報告です。「よくわかんなかった……」

たったこれだけのやりとりに、私はこの教室のすべてを教えられた気がしました。そこに集う人たちみんなが「ここは私の教室だ」と思っていること。他人同士なのに兄弟姉妹のような一体感。個別なのに集団の中にいるような安心感。すれ違うだけで自然と会話が生まれる距離感。教室という大きな空間に包み込まれている温かさを肌で感じた訪問でした。

異年齢教育!?

年齢で考えてみると、六、七歳から十九歳までの教わる子どもたちと、十八歳から二十五歳前後の教える子どもたちが、当時三十前であった私のもとに通ってきていたということになります。この二十年という年齢幅の子どもたちが毎日夕方から夜遅くま

で入れ代わり立ち代わり通ってきては、家庭でも学校でもない〝第三の教育の場〟に会します。そこでは自分と五歳も十歳も年の離れた人と知り合う機会があちこちに転がっていて、子どもたちは学校や学年に関係なく友達になり、仲良しの先生を増やします。高校や大学に合格し塾を巣立つと、数年後には講師になりたいと塾に戻ってきます。勉強を教えてくれた先生たちの姿を目標にしながら、かつての自分と同じ年ごろの地域の弟妹たちの勉強を見るのです。彼らは互いの中に〝過去の自分〟と〝未来の自分〟を見つけ、この小さな小さなコミュニティの中で「見せる・見倣(なら)う」、「教える・教わる」の学び合いを繰り返しています。教える資格をもった大人はいません。けれども、彼らは確かに「学ん」でいます。二十年の開きがあれば、当然学習内容はさまざまです。また、一人ひとりの学習には家庭環境だけでなく、時代や政策も大きく影響しています。しかし、教科学習は単なるきっかけにすぎず、もっと大切なものを教え合い、学び合っているのではないか。こうして変わらずに繰り返される学び合いの中に、何にも左右されない一筋の流れがあるのではないか。教科教育の世界から特別支援教育の世界へ、そして保育の世界へと順に足を踏み入れた私にとって、それは源流をたどるような足跡となったのでした。

独りぼっちの学び

一筋の流れとして続く「学び」を探る試みを始めた時、ある出来事がフト思い出されました。私が間接的にかかわっていた教室でのことです。

A君が塾を休みがちであると□□教室のスタッフから相談を受けました。A君は週一回数学を習いに通っていた中学一年生です。小学六年生の三月に中学進学準備のために入塾し、地域の公立中学校に通い、残暑も一段落したころでした。学校の定期試験の成績は下がる一方で、塾で補うことで辛うじて学習を支えている状態に、A君のお母さんもここで通うのをやめてしまえばもう取り戻せないくらいにおくれてしまうのではないかと心配しています。A君

を担当する講師もスタッフと共に指導方法を模索していたそうです。対応を考えあぐねているうちに、A君本人から退塾の申し出がありました。彼は電話口で「学校の勉強だけにします」と切り出し、つぶやくようにこう続けました。

「塾に通っても学校の数学がわかるようになりません。みんなはもう方程式の文章題をやっているのに、僕は方程式ができないからみんなと同じプリントが全然できません。数学は積み重ねだから復習は大事だってお父さんも言うし、僕も＋（プラス）とー（マイナス）の計算がちゃんとできなくちゃいけないってわかってるけど、でも、僕もみんなとおんなじ勉強がしたいです」

こんなにもA君を追いつめてしまっていたことを、私は塾の大きな反省として胸に刻んでいます。指導要領をもたない自由な教育者として、私はいったい何を目指してきたのか。私は特別支援教育を学び、A君に合わせた指導法の存在を知りました。けれど、たとえA君に正負の数の概念を理解させ、方程式を習得させることができても、A君の助けにはなれなかったのではないかと思えてなりませんでした。

教科に閉じ込められた世界

A君の「みんな」という言葉。A君はクラスでの疎外感を精いっぱい伝えてくれました。数学という教科をどこか個人プレーのような科目だと思っていた私は、「みんな」を必要とする科目だと考え改めました。こうなったら思い切ってすべての科目から教科の枠を取り外してみたらどうだろう。すると、次のような科目固有の学びの一面が見えてきたのです。

【国語】言葉を通して人から人へと信頼をつなげていく学び

過去を生きた人、今を生きる人、その人たちが見、聞き、感じ、考えたことを一つひとつ受けとめていく科目。その作業は常に問いとして自分自身に語りかけ続けなくてはなりません。言葉を受けとめる手助けをしてくれる先生への信頼も築かれていきます。

【数学（算数）】 物事のプロセスを一つの真理に向かって積み上げていく学び

言葉を超えた共感や一体感が生まれる科目。記号や図形の世界を操る先生はまるで手品師のようです。時間と空間を超えてみんなが同じ方向に向かって進みます。近道しても遠回りしても寄り道してもゴールはたった一つ。たとえつまずいたとしても、ゴールへの道は確かに続いています。

【理科】 好奇心と想像力を引き出し、未来を生きることに夢と希望を膨らませる学び

見えている世界を手掛かりに、見えない世界を旅する科目。遠くて見えない、広くて見えない、深くて見えない、大きくて見えない、小さくて見えない……、見えないことだらけの不思議な物語です。生物無生物の垣根を越えて生命の存在と尊さを学び、自分自身の誕生の奇跡を見つめます。

【社会】 過去の人や年長者、世の中の人々を敬う心を育てる学び

人と人がつなぐ世界やコミュニティの存在を知り、自分もその一員であることを知る科目。人類の、世界の、日本の、社会の、地域の、家族の一員である意味を考えます。自分が今ここにいることへの感謝の気持ちと誇りをもって、これからの人生を豊かに送るスタートラインに立ちます。

【外国語（英語）】 異なるものや未知のものへのあこがれを育み、ふれあいやコミュニケーションの大切さを知る学び

自己と他者の存在を認め、相手を思いやる心を広げる科目。それは目の前にいる人だけにとどまらず、地球の裏側にまで広がっていきます。自分の思いや考えを伝える方法を模索しながら、全身を使って表現し、理解し合う喜びを体感します。

流れの先にあったもの

そうです、教科の枠が取り払われた「学び」は、保育に携わる方々が大切に育んでこられた「学び」と、うり二つだったのです。私は保育を学び、ようやくその源流にたどり着きました。どの科目も、就学前の子どもたちが日常の保育や遊びを通じて五感で感じてきたことばかり。教科教育の視点で見れば、子どもたちは学びの階段を一段一段あがってくるよ

うでした。けれど、保育の視点で見たら、緩やかな上り坂を一歩一歩のぼっていたのです。

保育の時期を終え、森羅万象を感じる心をもって教科に出合った時、子どもたちは自分のこれまでの感覚としての学びを整頓するよう導かれていきます。「感覚としての学び」とは日常生活にちりばめられた、教科に分化されていない混沌とした学びです。学校は、その漠然とした感覚や感性を「思考」として整理するための道具 ―文字や数字、記号、知識の羅列― が与えられる場です。それらの扱いを教わり、懸命に操りながら、子どもたちは何年もかけて整頓していきます。そこにむなしさを感じた時、大人や仲間の存在が彼らの孤独な学びを助け支えるのです。

幼いうちに教科教育にはめ込まれ、学びの本質をなおざりにされて育ったら、あるいは、豊かな感性があってもその学びを共有できる大人や仲間がいなかったら……。どんなに立派に外枠を積み上げていっても、空洞の学びはある時突然にその子の中で崩れてしまうでしょう。その子の今にふさわしい環境を用意する、これは学びを支える大人の使命だと考えます。大人が本質を忘れて枠組みだけに執着することは、子どもたちの中に育つべき「人としての真の学び」をないがしろにしていることと同じです。感じる心は長い時間を経て、思いやりや勇気に育ちます。感謝の気持ちや敬う心に育ちます。想像力や探究心に育ちます。失敗にくじけない心や忍耐力に育ちます。人を信じ愛する心に育ちます。一人ひとりを中心とした無限の広がりをもっているものです。自分たちの学びが教科という枠に収められても、子どもたちはこれまでの世界と何ら変わらない場所として受けとめ、生き生きと学び育っていく。これこそが、保育、教育に共通して、私たち大人が子どもたちの中に育ってほしいと願う学びの姿ではないでしょうか。

（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター）